

【優秀賞】

友だちとすべったスケートリンク

瀧井久美香（京都府 京都市立西京高等学校附属中学校 3年生）

浴槽にもたれながら、一人切り裂いたぬいぐるみの腹に何を入れようか考えていたら、不意に名案が浮かんだ。

それはあまりにも残酷な仕打ちだった。しかし、その無慈悲な心が当時の私にはひどく愉快だったのかもしれない。

このところ、ストレスばかりためている。中学三年生の夏とすることもあり、そろそろ受験の脅威が間近に迫ってくる。いや、私は決して成績が危ないとか、ついていけない科目があるだとか、そういう低次なことで悩んでいるのではない。ただ、課題があまりにも多過ぎた。学校の提出物に加え、毎日出されるようになってた塾の宿題。通学や帰宅中の電車では、人目をばからずひたすら問題集を解いている。最近では食事の時間も面倒に思われて、好き嫌いをせず、一定のペースで食べられるようになった。と言うより、味覚がなくなつた。いや、これだけならまだいいんだ。勉強することは我々人類に課せられた使命同然なのだから、しない方がおかしい。生きていくためなら、たとえ健全な心を犠牲にしてもでも勉強しないといけないことは分かっている。ただ、私はさらに多くの苦悩を抱えているのだ。その一つとも言えるのが、

部活。体育系の部活の三年生はほとんど夏の試合で引退するのにな、私の所属する演劇部は十月の発表会まで練習が続く。おまけに、やりたくもない「副部長」というおせっかいな名譽を背負って。他の連中……失敬、他の部員は才能があるのに集団心理に取りつかれて、とぐろを巻いている。部長も先生も来ないし、散らかった部室を片付けて、下校時間に遅れたことはもう何度もあった。家に帰っても、幸福な時間なんてやってこない。親の顔を見ただけで訳のわからない恐怖心と激しい憤怒に覆われる私は、反抗期では片づけられないもつと複雑な悪夢に取りつかれてしまったと言えらるだろう。まあ、少し前の偉人が「好きの反対は嫌いではなく無関心だ」なんて言ってたような気もするから、あながち悪いことではないのかもしれない。いや、でも昔はあれほど嫌悪していた兄も、今では不必要な存在と認識することで怒りを抑えられるようになったから、もしかしたら無関心は嫌いの延長線上にあるのかもしれない。

「先週の道徳の時間で大切なものを訊かれたとき「友達・家族」に手を挙げた人が一番多かったのは、信じられなかったな……。」誰のためでもない、恥ずかしい独り言は浴室の冷徹な壁に響いた。

やり場のない思いは足枷のようにずるずるとくっついてきて、浴槽を出る足がやけに重たかった。シャワーの調子が悪いのか、時々頬に冷たい滴が当たる。目の前には人間の物とは思えないような、狡猾な笑みが、一つ。

文集。私の小学校では、年度末に作文を書かされてそれを学年全員分冊子にまとめるのが習慣だった。拙い文章とやけに丸みのある字が、幼気な雰囲気を漂わせている。人々はそれを「思いつい

と言ひ、大切にするのが普通なのだろうと思う。私も、今日まで大切にして……きた。ベッドの横、小さな棚の最下段。赤い表紙をしたそれを指先でつまむと、辺りに埃が舞い上がった。「なかよし」二年生の文集はそんなタイトルだった。この文集を初めて手にしてから丁度三年後、私は友人に別れを告げることになる。彼女は、私の人生において唯一親友と呼べる人間だった。隣の家に住んでいたから、登下校も遊びに行くのも、習い事だつて一緒だった。けれども、彼女と同じクラスになれたのはたつた一度つきり。

二人で庭に植えたイチゴが今年も実つて、誰にも食べられることなく枯れていく。イチゴも頑愚なやつだ。花托でごまかされた果実は、もう誰にも気づかれることは無いのだから。

そんな馬鹿げたことを考えながら、私はもう一つの冊子に手を伸ばした。四年生の文集のタイトルは「光」。パラパラと紙をめくっていると、殊の外私のページはすぐに見つかった。まだ、当時の私は眼鏡をかけていない。写真の前で笑っている姿は非常に奇妙だが、シャープな目の形は今も変わっていない。無知な笑顔が、やけにしゃくに障る。強引にページをつかんでそのまま手に力を入れようとした瞬間、誰かが私の中で囁いた。

―破いていいの？

破るために、わざわざ文集を取り出したのに。でなければ、わざわざ貴重な勉強時間を削つてまでこんな行為はほしくない。

―大切な「オモイデ」だよ。

大切な大事な、思い出を消すためにここまで来たのだ。

―もう二度と手に入らないよ。

―だからいいじゃん。

―取り返しのつかないことになつ……

たつていい。後悔してもいい。この鬱憤を、誰もこじ開けてくれなかった心の闇を少しでも紛らわせたらそれで十分だから。

潤いのない音が、おかしな少女の住む部屋に木霊した。

紙切れを持つ少女の笑みは、まさに悪魔。なにが楽しいのか、その鋭い目で紙を上げしげと眺めては不自然な方向に口元を緩めている。何人も、その紙の内容を想像できないだろう。

私はどこか釈然とした気持ちで、不気味に笑つてみせた。リビングから持ってきた黒色の電動シユレツダーをコンセントにつないで、スイツチを入れる。千円ぐらいで買った安物だから、だいぶ太く切れてしまうけどかまわないだろう。誰かが心底で叫んでいるが、聞く耳を持たない。緑のランプが点灯した。綽然とした手つきで「思い出」を差し込む。口の両端が異常なまでに吊り上がったのが、自分でも分かった。

騒音を立てて、綺麗に切断される紙。思い出の末路があまりにも美しい長方形の姿に仕上がったから、私は思わず声を立てて笑つてしまった。

まさに、狂人。悪魔に取りつかれたように、甲高い叫びと低いうめき声を交互に放つ。胸の蟬りがすと溶けて、でもまた何か新しい元凶を生み出しているようで、泣き出したいぐらい快絶な気分だった。

カーテンで閉ざされた世界には、月の精光は届かない。大声で叫んでも、夜空の星には聞こえない。そこにはただ、戦慄してしまいそうな狂気が満ちているだけ。

一度ラインを越えてしまえば、もう何も恐れるものは無かつた。私は学校説明やクラスの集合写真のページを次から次へと引

き千切っては、シュレッダーの口に差し込んでいった。チェーンソーで人を切り裂くような、けたたましいうめき声。それがやけにうるさくて、リビングまで届いていないか少し不安だった。

「ま、どうせあいつらなんて来てくれないからいいしょ。」

粗暴な破り目の数々。四分の一ぐらいいかない表紙。おなかいっぱいになっていく、無機質な黒い箱。蓋を開けると刃の隙間から、美しく切断された紙がまるで血管のように垂れ下がっていた。

乱暴にそれを引き千切ると、目の前に無言で転がっているペンギンのぬいぐるみを開いた。ナイフで裂いた腹に、おぞましい紙の束を突っ込む。

「ハハッ。ハハハハハ……」

壊れたオートマタのように唾う私。腹から飛び出た綿はまるでどす黒い血のように、細長い紙は腸のように残酷で。

今から思うと、そこで終わらせておくのが正解だったのかもしれない。しかし人の欲というのは際限が無いもので、低次の欲望が満たされるとさらにその上を求めてしまうのだ。

私は勉強机の引き出しから小型ナイフを取り出すと、親指で鞘をはじいた。カポンと間抜けな音が合図になって、裏表紙に刃を突き立てる。意味もなく、ただ感じるままに右手を動かしていく。深く深く、挟るように。ページを開いて、先生方の顔写真が載っているページも同じように傷を付けた。

もつとも、私が「センセイ」という存在を忌み嫌うようになってしたのは小学校六年生以降のことなので、当時の先生方に何か恨みがあったわけでは無い。しかし、その無益な行為が言いようもない悦楽を私に与えてくれたのであった。……さすがに、他の生徒には手を出さなかった。

「もつと大きなものを壊したい。」

一瞬、兄のような低い声が出て、すぐにそれは自分のものだと気づく。

大きなもの。おそらくそれはこの文集の中で、一番大切な「思い出」。私が四年生を選んだ最大の原因。

島崎美衣

唯一の親友は……親友だった人は、そんな名前をしていた。私のページの二つ後ろに彼女の写真が載っている。色白な肌。レンズの向こうにある、大きくて可愛らしい目。お花畑のように笑うその顔は、私の卑劣な笑みとは違い、まさに清廉そのものだった。

人の顔を見るのはあまり好きではない。俗に言う、イケメンとか美女なんかも見れば見るほどその人の醜さが伝わってきて、目をそらしたくなるのがいつもだった。しかし、彼女だけは違う。見れば見るほど芳潤な香りが漂ってきて、その声を、仕草を永遠のものにしたいと思ってしまうのだった。と同時に、優麗な花卉の中に包まれた彼女の孤独を、暴いてやりたいとも思うのだった。

壊すのには申し分ない「思い出」。優美を極めた花顔にナイフを刺そうとしたとき、私は思わず身震いした。飛び込んできたのだ。柔らかな文字が。決して強引にこじ開けようとはしない。しかしそれは確かに私の心に浸透していった。深く、深く。

なかよしの友だち・かななさん

ああ、私の名前が載っている……。

自分のプロフィールに、最低な人間の名前を書くことができる彼女の優しさが、信じられなかった。五年後、その人に裏切られ

るとも知らないで。

気づいたらナイフは私の右手から離れていて、代わりに両手でしっかりと文集を握っていた。朦朧とした頭で、何とか言葉を読み解っていく。そこに意味を見つけようとする。

楽しかったスケート学習

島ざき 美い

わたしはカナダではじめてスケートをしました。スケート場に行くバスの中で、わたしは、スケートリンクに立てるかな、転んだらいたいかな、などいろいろ心配していました。

レッスンははじまり、リンクに立ちました。しかし、すべろうとしても足が動きません。手すりにつかまらないうと立てませんでした。

「ここからどうしたらいいのかな。」と言ったら、かなさんがきて、手をつないでくれました。なんとか一緒に先生の所へ行くことができ、初級の授業をうけました。

二回目のスケート学習の日がやってきました。そこで、中級に上がることができました。回る練習は難しかったけど、先生も友だちも優しく教えてくれました。スケートがどんどん楽しくなりました。

来年のスケート学習ではもっと上手にすべりたいです。いろいろなすべりかたを覚えて、自由にすべりたいです。だから、たくさん練習してかなさんみたいにうまくなりたいです。

涙が機関銃の弾みたいに飛び出して、瞬く間に私の心を黒く染めた。

断腸の思い。まさに絶望。腐った血の池に溺れているような恐

怖。それでいて、得体のしれない何かに脳を突き破られたような……。

足元ですすり泣いている哀れなペンギンが、まるで私のように思えた。今の私は、こんな風に泣いているのだろうか？ 体液も。内臓も。全部ぶちまけた凄絶な姿で。

よろよるとその場に崩れ落ちる。銀の刃が目の前に横たわっている。私は震える手でそれを掴むと、十字架のように胸に構えて、ただひたすらに泣き叫んだ。

カーテンで閉ざされた世界には、月の精光は届かない。大声で叫んでも、夜空の星には聞こえない。そこにはただ、戦慄してしまいそうな哀切が満ちているだけ。

狂っても、号哭しても、結局私は一人だった。狭苦しい小暗い檻で、ただ暴れているだけだった。

「バ、バカ。」

人の泣く声は本当に不愉快で気持ち悪い。

「バカだな、俺って。」

感情が高ぶると、一人称に俺を使ってしまうのは悪い癖だった。

ナイフを握る力が強くなった。折るように頭を下げる。

「ああ、神様。どうか私を許してください。卑怯と冷酷に染まった見苦しい私を！」

「美衣ちゃん。もう許してなんて言わない。」

「私は罪を犯しました。それも完全な破廉恥罪です。」

「取り返しのつかないことをした。「思い出」をこの手で切り裂いた。」

「償うためならなんだってします。勉強も、副部长も、今まで以上に頑張ります。」

「こんな最底辺の人間になるくらいなら、姉じゃなくて私が死ねばよかったのに。……つま、そんな陳腐な言葉、言うだけ無駄か。」
「だからどうか、お許しください。」

「絶対に許さない。」
「救いの手を！」

「絶対に生かさない！」

そう吐き捨てて、ナイフと体をベッドの上に放り投げた。心地よい浮遊感と、若干の痛み。

天井の蛍光灯に、一匹の虫が飛んでいた。虫はライトの円をなぞるようにクルクルと回ると、光の中へ消えていった。

泣きながら笑った。泣きながら幸福だった。シートに雨が垂れて、不可抗力で染みていく。数日後、カビが生えてしまいそうだけれど、今はどうでもよかった。ただこの虚しい応報に心を打ちのめされていたかった。

きつと。きつと、明日には忘れていると思う。いや、もしかすると夕食後にはまた素知らぬ顔で、問題集に向き合っているかも知れない。でもいい。今だけは、しっかりと胸に刻んでおきたい。親友がくれたもの。五年の時を経て、届けてくれた最高のプレゼント。

私が、彼女の友だちだという証。

月の光はもう届かないけれど、蛍光灯に溶けていく心は、実に清らかだった。彼女の笑みのように、純潔だった。

せめて最後に知りたいと思った。私が書いた、作文のタイトルを。

涕泣する黒い箱をそっと撫でて、中から取り出した紙の中にその答えはあった。

タイトルは……